

# 『居思漫録』 六

服部 仁

『居思漫録』一〜五の続編である。今回もまた紙幅の都合により、全体の約八分の一、坤の巻の四分の一から二分の一までを紹介する。書誌・凡例を再録する。

## 書誌

編成…大本 二卷二冊 二十七・三×十八・八纏

表紙…白茶色、無地

題簽…左肩に無辺の題簽(十七・五×三・三纏) 「居思漫録 乾(坤)」

見返…白紙

序題…なし

目録題…なし

内題…居思漫録之一(二)

柱刻…なし

尾題…なし

字高…二十一・二糎

丁数…乾 七十丁

坤 七十八丁

行数…十一行

印記…乾坤各一オに丸に岡村ほか五朱印、各最終丁ウに一朱印、

### 凡例

一、旧漢字・異体字は、基本的に現代通行の文字に改めた。ただし、「躰」「鍊」「炮」「船」「證」「迹」については、字の形が通行の文字とあまりに異なると判断して、そのまま残した。

二、片仮名については、基本的に片仮名の意識をもって書かれたと思われるものを片仮名としたが、「ハ」「ミ」については慣例に従ってそのまま残した。

三、濁点等は基本的に打ってないが、稀に濁点の打ってあるものがあるので、そうしたものは「(濁ママ)」と注記した。

四、本書に句読点は一切打ってないが、読みやすいように一律に読点を施した。

五、( ) の付してない小文字の注記は、原文を筆写した者の注記である。この注記のほとんどは朱記であるが、十一丁オの「落字歟本ノマ、」等は墨書である。なお本文中の割注は原著者の注記であるから、もちろん墨書である。

六、( ) の付してある小文字の注記は、服部が私に施したものである。

七、罫字については、適宜、数文字分空けた。

八、各丁表、裏の最後に、(8オ)とか(12ウ)というように丁数を示した。

九、底本には架蔵の写本を使用した。

〔承前〕

敵にへつたりと付てはなれぬぞ」と仰ける、(19オ)

○元龜三壬申年十二月廿二日 上様浜松より三里に及て打出させ給ひ、御合戦なさるへきと仰けれハ、年寄衆の申上げるハ、「今日の御合戦、如何に御座あるへきや、敵の人数をミるに、三万余りと見え申也、其上、信玄ハ老武者と申、度々の合戦になれたる人にて候、御味方ハ纔八千の内外に御座あるへく候」と申上けれハ、「其儀ハ

何もあれ、多勢にて我やしきの背戸をふみ切り通らんを、なとか出て咎めぬ事の有へきや、居ながら通す処にあらず、兎角合戦をせてハ置ましきそ、軍は多勢無勢にハよるましきそ、武運次第」と仰けれハ、「是非に及す」とて押よせけり、扱、敵を大田へ半分過ぎも引おろさせて切かゝらせ給ふならハ、やすくと勝せ給はんものを、早過て、早くかゝらせ（19ウ）玉ひし故、信玄ハ度々の陣に逢て功者なれハ、魚鱗に備を立て、引詰させ給ふ、上様ハ鶴翼に立させ給へハ、小勢手薄く見えたり、先郷人原を出させ給ひて飛礮をうたせ給ふ、然りとハ申せとも、上様の衆ハ、面も不振しころをかたむけて切かゝる程に、早一二の手を切崩しけれハ、又人を入替てかゝるを切崩し、信玄の旗本まで切付るに、信玄の旗本より真黒に、ときをとつと上て切てかゝる程に、僅八千の人数なれハ、三万ヨの大敵に、手を碎き、せり合たれハ、信玄の旗本に（僅八千旗本也）朱で補切立られて敗軍す、上様は御転動なく、御小姓衆を「討せし」と思召て、乗廻し給ひ、真丸になつて退せ給ふ、馬にて御供申衆ハ菱沼藤藏・三宅弥次兵衛、其外ハをり立ける馬に離れて歩立なり、中にも大久保新十郎をかなしひ（本ノマ、朱注）給ひ、小栗忠藏に「馬を一ツとれ」と仰なれハ、（20オ）「相心得申」とて、頓て取て乗ける、忠藏も手を負けるか、「其馬を新十郎に借間敷か」と仰られけれハ、御意より早く馬をとひをり、新十郎を乗せて、「我ハ股を鎗にて突れけるか、少しも痛す、御馬に付奉り、御城迄御供申」、上様より御先へかけ入て、「上様ハ討死なされたる」と、偽りを申処へ、何事なく入玉へハ、彼者ともハ、又爰かしこへ逃かくれけり、上方の牢人中川土（土）の横に朱で「土と確認訂正」源兄（兄）を朱で補弟は、覚の者と申つるか、浜松へハ忍のかすして（本ノマ、朱注）川へにけて行、水野下野守ハ、今切を越てにけ給ふ、山田平一郎ハ岡崎まで逃行て、次郎三郎様御前にて「大殿様討死なさ

れ候」と申上る処へ、上様ハ何事なく御城へ入らせられ候、諸大名衆も何事なく引のけ申と也、但、信長の御加勢平手と、御手前の(20ウ)衆にハ青木又四郎・中根平左衛門計物主ハ討死仕候、其外、若き衆も家老とも、鳥井四郎左衛門・本多肥後守・加藤粘丞・同九郎八郎・米木津小太夫・大久保新藏・河井八斗兵衛・杉之原十斗兵衛・神原撰津守・成瀬新藏藤藏(藤藏 朱で捕)・石川平三郎・夏目次郎左衛門・河井又五郎・松山久内・加藤源四郎・松平弥左衛門殿(本ノマ、斗カ 墨挂)、此外に此通りの衆多く候得とも、記に不及、信玄ハ犀嶮にて首ともを突検して、其まゝ陣とらせ給ふ処に、大久保七郎右衛門か申上けるハ、「ケ様に弱々としてハ、弥敵方きほひ申へく諸手の鉄炮を御あつめなされ候へ、我等か召つれて夜討を仕らん」と申上けれハ、「尤」と御捷にて諸手を集め申せとも、出るものもなし、やうく諸手よりして二三十挺斗り出るを、我手前の鉄炮に相加えて、百挺斗召(21オ)連て犀嶮へ行て、つるへを敵陣へ打こみけれハ、信玄、是を御覽して、「扱もく勝てもこはき敵にてハ有ける、此程こゝハと云者ともをあまた討取られて、さこそ内も乱れて有やらんと存知つるに、か程の負軍にハかよふにはならざる処に、今宵夜こみハ、扱もく奇特也、未たよき者とももの有と見えたり、とかくに勝ともこわき敵なり」とて、そこを引のけ給ひて井の谷へ入て長篠へ出給ふ、

○永祿十一年戊辰十一月、天王山へ御旗を立給へハ、城よりも爰(本ノマ、朱挂)の者とも出て厳しくせり合あり、其頃信長公(公 朱で捕) 牢人して駿河へ下り、氏真か供して城に籠り居たる衆の内、伊東武兵衛をハ掠久原次右衛門討取、大谷七十郎を大久保次右衛門忠佐か討取、小坂新助(21ウ) 大手の塗違まで押込、討取、其外、高名数多あり、掠久原印旛に申、「今日は組討仕たる」と申上けれハ、大久保次右衛門申けるハ、「今日の高名に組

討ハ一人もなし、御身の討たるも、青皮の具足を着て鎧炮にあたり伏たるを討給ふ、今日のハ悉く冷首也、我等取たるも鎧炮に中り死たる冷首にて候」と申処へ、内藤四郎左衛門忠成高名して来り、申ハ「今日の高名ハ、某を初、悉く冷首にて候」と申上けれハ、内藤四郎左衛門、「大久保次右（左を朱で「右」に訂正）

衛門か申候と、扱も合たり、両人の衆にハ似合たり」と、人々申ける、

○文龜三年、細川武藏守政元の臣、沢倉と云もの、武略ありて近江を半ハ切したかへけれども、蒲生下野守貞秀入道知閑、音羽の城に在て沢倉と軍す、沢倉「音羽ハ山城なれハ水乏しからん」（22オ）とはかりて、水の手を切取たり、知閑、敵より見ゆる矢倉の前に馬をあまた引出させ、白くしらけたる米を桶に入波かけて、人々はたかに成て馬を洗ふ、沢倉遙に是を見て「思ひの外に此城水多し、斯て久しく陣せは、兵糧尽なん」とて、困を解て引退く所を、知閑、繩手の要害に打て出、十分の勝利を得たり、知閑は氏郷の祖父なり、

○大永年中、細川武藏守高国入道道水、三好左衛門督と相戦ふ、三好、桂川を渡りて高国の陣に押寄る、波多野備後、高国に怨ありて丹波の兵を引具し、高綱に背き、三好に組しけれハ、高国の軍敗れたり、高国の将荒木安芸守、百斗りの兵を引分ち、「人々、此有様を見よ、月花酒妾の時の言葉にハ似さりし（22ウ）なり、恥を知る弓取のなき世なり、我、唯今道水の為に命を捨て恩を報すへし、さらすハ道水遁れたまハし、此戦場を引退たりとも、人並なれハ、強ち独のミ誹らるへきにもあらずといへとも、義を知りて義をせさるハ、弓箭取身にあらず、各もまた真の士となりて吾とおなしく義をふまんや、吾と思ハんには強ゆへからず、如何に」と言へハ、皆々「こハ口惜き事共（もを朱でミセケチで「共」に訂正）

承り候、日頃の所存をしろしめさすと覚え候、いかて斯る時、き

たなき振舞すへき」と、少も落散へき色なし、荒木「さそあらん、誠に主従の契り、此世のミにあらざりけり」とて、打笑て、京軍の崩るゝを余所に見て、ひしと折敷待かけたり、阿波・丹波の兵、きそひ掛るを間近く引受、「吾を誰とか思ふ、管領の下に荒木安垂守といふ者（いふ者 朱で補）（23オ）そ」と呼り、一同に立上り、先掛たる敵、十人斗り突伏ければ、しさる所を追立る事、五六十間を限りとし、「離れくくなるへからず、遠く追詰て疲なしそ」と、又そこに折しきかゝる敵を待受て突退く、幾度となく戦ひたるに、敵討るゝもの数をしらす、荒木主従、一人も残らず討死しける間、高国、わづかに近江の国に遁れ得たり、

○天文年中、大友義鑑の臣、朽綱下野守親満、謀反して高崎の城の二の丸を乗取て楯籠りしに、佐伯惟常ハ大友家の旗下なるか、斯と聞、持築より馳来る、佐伯、平生鷹狩を好む、専ら狩の為にあらずして軍立の為なり、狩に出る時ハ、或ハ途中より使を走らせて士を呼ぶ、士に將たる者ハ、騎馬の（23ウ）軍兵を引連て即時に来る、歩士、又弓の物主たれハ、組の卒を引連て駈集る、此故に、不意の時といへとも騒ぐ事なし、半時はかりの間あれハ、数日前より陣せしにも、陣列整ひて静なり、使に走らすものハ、壮なる者を三十人撰て馬の前に打連たり、常に、かけはしりになれて、息永く、足健にして、馬にもおとらぬ程なり、此時、佐伯の士、杉谷次郎太郎・同次郎三郎とて兄弟あり、相共に一番乗りを志し、城の塀、いつれの方か上るによろしからんと目を付置、鎗の柄四五所、繩にて足たまりを結び、一同に攻かゝる時、杉谷兄弟、兼て心を付置し所に始より近付居て、走り付と鎗を立かけ、終に登り越て、一番にそ入たり、（24オ）

○上杉景勝、新発田因幡守治長を攻らるゝ時、治長の士、波多野忠左衛門とて強力の者あり、景勝よせらるゝ道二

筋、中に近き方を三淵と云て一騎打の嶮岨有けるを、「是に待て、景勝通らん時に無手と組て刺殺さん」と思ひ、三淵の岩穴に隠れ居ける、景勝已に討向ふに、皆口くくに「近き方より寄せ給へ」と云、景勝聞す、「迂を以て真とする事あり、危き道に不意の患ひあり」と云ひて、三淵にかゝらす、道を廻り進まれしかハ、波多野か支度、甲斐なかりしとそ、

○姉川にて、酒井左衛門尉忠次、先陣たり、二陣榊原康政なり、酒井を始、小笠原與八郎・管沼新八郎・奥平等、川を渡りて掛りけるに、岸高く上り兼たる処に、榊原真一文字に進て、川より（24ウ）高き岸を「無二無三に押上よ」と「ゑい、とふく」と云ふて押上り、酒井か先に進んとするを見て「見て」朱を捕、酒井「おくれてハ無念なり」と競ひかゝりて利を得たり、神祖「榊原か二の手の仕方、以来の手本なり、二の手は如斯してこそ」と仰ありけり、

○信長、浅井長政を討時、長政か木造の陣、俄に騒く体の見えしかハ、猪子兵助を物見にやられけるか、又金松弥五右衛門をも出されたり、猪子、馬に白味（マ）はませて飛帰り、「敵ハ引退候」と云も果ぬに、金松乗帰り「敵押寄候」と言捨て、又先陣に行て鎗を合せたりき、信長、後に二人を呼て「汝等見し処ハ如何に」と問るゝに、猪子ハ「敵、荷付たる馬を遙に遠く引のけ候程に、引退くと見て候」と云、金松「見る処ハ猪子に同じく候、されとも軍を志し候（25オ）長政か、故なくて空しく退くへきや、押寄て戦ん為と存候き」と申せしかハ、信長、大にほめられける、

○天正二年四月 神祖、天野宮内左衛門景貫か大井の城を攻させ給ふ時、大久保七郎右（左を朱でミセケチで「右」に訂正）



衛門忠世か同心杉浦久藏、深手負たりしに、忠世馬より飛下り、「是に乗て引退」と云、久藏（久藏）朱で補、「うつけたる馬の下り所かな、我、若者かいか斗り討れたりとも何事かある、大将たる人の、馬離するものかハ、八幡も照覧あれ、乗らし」と云へハ、忠世、「礼義も所によるぞ、とくく」と云ハ、久藏、「我、此馬に乗て生、大将を捨殺していかせん」とて乗らされハ、忠世も「いなむならハ馬を捨よ（る）朱で「よ」に訂正」と云捨て、引んとする所に、小玉、其内馳来りて「七郎右（左）朱でミセケチで「右」に訂正 衛門ハ、早退きたるぞ」と言て、久藏を引立、馬に打のせ、やかて（25ウ） 忠世に走り付たり、七郎右（左）朱でミセケチで「右」に訂正 衛門忠世ハ、兵藤弥惣・犬若と云者と、三人打連て細道を引退し処に、跡より追来る者、七郎右（左）朱で「右」に訂正 衛門を突落す、三人も続て飛かゝる処に、犬若、揚羽の蝶の差物持たる敵を見て、是を取らんとする所を、弥惣（弥惣）朱で補 走りかゝるを、かなくり取らんとすれハ、敵、弥惣を一刀切たりけるに、七郎右（左）朱でミセケチで「右」に訂正 衛門取て返して、敵三人を討取たり、神祖、「剛将の下に弱兵なし」と、忠世（忠世）朱で補 を御称美ありけり、

○神祖と武田の（の）朱で補 兵と大天竜にての戦ひに、近藤伝次郎手負て、渡辺半藏を見かけ、「手負たるぞ、連て退けよ」と云、半藏「心得たり」とて、手に提たる首を投捨て、伝次郎を肩にかけ、三里余り引退、助けれハ、神祖聞し召、「味方一騎討るれハ、（26オ） 敵十騎の強ミと云てあり、味方を助けしハ、七度鎗を合せしより勝れり、今より後、鎗半藏と云へし」と仰せあり、後、半藏人に語りしハ「伝次郎を、我なれハこそ助けたれ、何として退け負へき、かゝる時、大方助る体にして刺殺して捨るものなり、味方なれハとて、頼ミにならぬものよ」

と云し、

○天正三年六月、神祖、二股の城を攻給ふ、城主ハ依田下野守幸成なり、其子右衛門幸致、城を出て鳥羽山の下の小川を際て防戦ふ、内藤弥次右衛門、家長強弓の手にて、散々に射しらます、松平弥右衛門忠長か子、彦九郎、敵に朱の挑灯の差物あるを見て、味方にも此差物有けれハ、誤て（誤て墨で補）敵の中へまきれ入、朝比奈弥兵衛、一矢にて射伏たり、内藤弥次右衛門ハ彦九郎（26ウ）と縁者の親ミあり、引返して弥兵衛を射る、其矢、弥兵衛か乗たる馬の鞍の前輪より跡輪をかけて射ぬく、弥兵衛か弟弥藏、馳来て、まつ屍を引退んとする処を、二の矢にて是も射倒したり、城兵、二人の屍を引退んとするを、本多忠藏進ミかゝりて追立たり、城主引退く中に、一人、手負て引兼たる者ありけるを、一人取て返し、是を助け、門内へ引入けるを、桜井庄之助勝次、敵の首一ツ取たりしか、又進んで追かけ行、神祖御覽せられ、「茜の四半の差物ハ桜井なるへし、深入するよ」と仰られけり、其時、敵の手負を助る者、やうく一の木戸揚、錠門の内に入、手負たる者ハいまた半ハ見ゆる処に、桜井走り付、手負たる者の足をとりにて三間はかり引出し、其首を取る、（27オ）其時、門内より、桜井か差物を打折けるか、屍にかゝりと、まりしを知らずして、五六間斗引取時、従者斯といへハ、又取て返し、差物取得て鳥羽山に帰り、首を奉る、神祖「只今の勇氣のいかめしき事、誠に無双と覚ゆるなり、是より後、ゆめく今日のごとく深く働くへからず」とて、遠州にて録を増賜ハリけり、彼従者も度く働き有て、後に士となして、内藤彦右衛門と云なり、

○山崎合戦に、堀尾帯刀吉晴の士、則武三太夫、首取て吉晴の前に来る、吉晴「思ひしよりも出かしたり」と詞を

かけしかハ、則武怒て首を提て進より、「かゝる時ハ大将も目くらなるものに候（候の横に朱で「候」と確認訂正）、則武三太夫か取たる首、よう御覧候へ」と罵る、吉晴ハ「にくき（27ウ） 奴かな」と、云まゝに刀を抜て切られしに、胄の星をけつりたり、則武真一文字に敵の中に駈入、又首を取て帰る、吉晴ハ「必ず則武（則武朱を補）討死せん」と悔ミおもハれしに、則武来れハ、大に悦んで「汝を先に誉たる詞、賞する余りに、思ひしよりもと云へるハ、剛の者にいふへき事にあらざるに、過にてこそあれ、汝二度の先かけ、大に勝れ候よ」と感せられけり、

○佐久間玄蕃盛政、柳瀬にて清秀を討取る時、秀吉、長浜より一騎かけに來られけり、志津ヶ嶽に至れハ日暮ぬ陣の間、相去る事二里斗なり、盛政、使を以て「早くも軍を寄せられ候、相待て候程に、夜明なハ矢合仕るへし」と云送る、秀吉聞て「是より申さんに、由々敷も承り候、明日、いさきよく軍を（28オ）遂げ候へし」とて、使を返して後、「我に懈たらせ、夜討せんとの事なるへし、遠き吳国の張良ハしらす、我をたハかるへきものゝ日本に在とハ覺えず」とて、野にも山にも、箒をすき間なくたかせて、白日の如し、佐久間ハ、「敵、人馬の行程を急きて、疲れたる処へ押寄、討侍らん」と思ひけるに、秀吉の謀にて、夜討の支度空しくなりにけり、

○志津ヶ嶽の軍に、堀久太郎秀政、兵を分ち出さんとする時、其臣、堀七郎兵衛、押しめて云、「勝家の陣より佐久間か陣に、頻りに使來ると見ゆ、とく引取れとの事ならん、若引取らハ、玄蕃元の道を帰るへからず、然らハ間近き所にて戦あるへし、玄蕃引取らすハ、勝家の（の）を朱でミセケチで補來りて戦あるへし、此二ツを出つ（28ウ）へからず、兵を分たすして待へし」と云、「玄蕃も退かず、勝家も進ずして、勝家連尽（尽敵と朱で補）たり」と云しか、果して敗北しけり、又志津ヶ嶽の事を老功の人に問しに、勝家の言のことく、「玄蕃引取らハ勝利全

らすへし、玄蕃かごとく勝家押詰来らハ、必敗軍すましき也、「両将互に猶予して勝を失ひたり」と語りける、

○志津ヶ嶽合戦の前夜、石川兵助と福島正則と口論し、既に差違ふへき体也しを、座に有し面々、「明日の軍に身を捨て功名を逐らるへき、こハそも如何なる事ぞ」と、押しけれハ、石川、面々の前にて口も得あけさる、「市松、何とてこはき鎗先に向ふへし、明日、我後影を見よかし」と、云捨て出けるか、直に柳ヶ(29才)瀬に赴て、唯一人、真先かけて討死しけり、人々、「其勇氣ハい<sup>タクマツ</sup>がめしけれとも、其怒ハいましめとすへし」と云あへり、

○長久手の軍に、水野忠重の嫡子勝成ハ目を病て胃をきす、鉢巻したりけるを、父忠重見て、「汝か甲ハいぐり壺にしたるか」と罵られけれハ、「父なから余りの言葉かな、真先かけて首を取るか、我首を敵に取らるゝか、二ツの中よ」と云まゝに、馬引寄せて打乗、もろ鎧をあてゝ駈出す、忠重、「あれハ如何にして」と、吉田重助と云士をして呼かへされけれとも、耳にも入れず、又、水野喜右衛門馳来り、引止んとするを、勝成にらみて、「畳の上の諫ハ聞も入へし、唯今大軍の中に馳入、功名せん時、留れとて引返すやうやある、」と云捨て、秀次の将、白江備後守か陣に突て(29ウ)かゝり、甲首を取りて馳帰る、此日の一番首なり、勝成荒者にて、人を物ともせず、忠重の心にたかひ、虚無僧となりて国々を廻りて武者修行す、後に忠重死して、神祖、三州荳屋を賜りて、日向守と称して、大坂の時、大和口の先陣として大功ありし人なり、勝成、十万石賜りて後、いよく士に下り、身を賤くして、「都而(都而朱を補)士に貴賤ハなきもの也、主君となり、従者となり、互にたのみあひてこそ、世は立ならいなれ、されハ大事の時ハ、身を捨て忠義をなす事たりかし、汝等、我を親と思ハれよ、我、汝たちを子と思ん」と、常に士に云ハれけり、或時、鷹狩の野にて、昔勝成に仕へし士を見かけ、「いかになつ

かしや、我方にて録三百石なりしか、立去て越前にて千石の録と聞、今爰に來られしハ(30オ)如何に」と問に、「仰の通、録ハ越前にて増し候へとも、殿の、下をいたはり懇にもてなし給ふハ、録にハ換かたくて、暇を乞て帰りぬ」と申せハ、勝成、大に悦んで「折にふれ、思ひ出せし也」とて、即時に録をましあたへられたり、其後、勝成隠居して、又鷹狩の時、彼士の家の門閉たるを見て問るゝに、「美作守の心に背く事ありて、暇を乞、去りぬ」と答えしかハ、「彼者ハ、越前の録千石を捨て、小録の我家を慕ひて帰りしものなるに、如何に作州ハ思えるに」(註)朱で補や、作州ハ江戸の風を似せられたると覺ゆ、斯云勝成ハ、若き時、心得違へて武藏の金川根笹流の弟子となり、尺八一本携て虚無僧となりて日本国を廻り、或時ハ堂塔に夜を明し、或時ハ野にも山にも日にくらし、(30ウ)さまざまに艱難にあひ、人にもそしられしか、一言虚妄を言事なく、不仁のふるまひせさりし故にや、今、福山十二万石を賜りぬ、然れとも、下の情を知る事ハ、是、虚無僧たりしゆへなり、返すくも惜むへき士を失ひぬるよ、扱、江戸風と云事ハ、公方には日本をたもたせ給ふ、福山ハ十万石の身上なり、江戸風の下の情にうとき事を似せて、美作ハ下の事を知らぬそかし、すへてよき士ハ、主君又ハ頭の下知をも、無理なる事ハ心服せず、たとへ少しの過ちありとも、能士ハ二度も三度も知らぬ体して、猶已かたくハ傍輩に諫めさせてんものを、美作の政事なかハしきそ」とて、泣れけるとかや、

○神祖、長久手の軍に勝せ給ひ、勢州蟹江の城、前田与十郎(31オ)を御攻あらんとて、打向ハせ給ふ処に、加勢多く馳入けるを御覽して、「敵いかほとも城中へ入よ」と仰られしを、酒井左衛門尉忠次承りて、「何とて押し止め給ハぬそや」と申す、神祖「如何思ふそ」と、仰られしかハ、忠次「城ハ堅固なり、多勢か籠りなハ、いかてか

攻落すへき、如何なる御思慮や候」と申を聞召、「大将、謀を言へきやうやある」と仰られしか、其後、援兵の乗来りける船を追払ハせ、粮道をたゞせ給へハ、忽、糧乏しくなりて、城を渡し降参しけり、神祖、四十二歳の御時也とかや、

○羽柴下総守勝雅か許に、二蔵三蔵と云し者あり、何れの城にての事にやありし、下総守、城より出て働き、引取たるを、敵付来る、二蔵三蔵、門をかためて上ヶ簗戸を下し、敵をたて(31ウ)籠めたり、勝雅、下知して門を明て、敵二人を出して、討取らず、近藤石見守、加勢たりしか、其子細を問へハ、「たて籠られたるハ、死地に入たる敵なり、是を討たハ、城兵あまた死傷すへし、打留たれハとて軍の勝敗にあつからず」と答ふる、石見守、武功の人なりしゆへ、大に感したり、

○島津中務太輔家久、肥前に攻入、島原の城、攻落したる処に、龍造寺隆信、大軍にて押寄たり、家久、僅三千斗成りしを、幾重ともなく取かこむ、家久、是を物ともせず、「明日の軍ハ、我先陣すへし、貝を相図に切かゝるへし」と定めて、夜の明るを待、朝霧深くて物のあいろも分たず、家久、将机によりて晴間を待つに、朝日出て晴わたりしかハ、子の文七郎豊久、十五歳に成けるを(32オ)近付、「天晴、武者ふりよ、唯上帯の結かくするものぞ」とて、結び直し、脇差を抜て其端を切て後、「能聞候へ、若、軍に勝て討死せずハ、此上帯、我解へし、今日の軍に屍を戦場にさらさんに、島津の家に生れたる者の思ひ切たりと、敵も知り、我も黄泉にて悦んものを」と言もあへず、貝吹立させ、真先に隆信の旗本に切てかゝる、島津の家の弓矢ハ、先駆の兵ハ、箭一筋射はなちて弓を捨、長き刀を抜て切てかゝる、今日も亦然したりけり、隆信旗本みたれ立、敗北すれハ、「きたなし返せ」

と下知し、遂に踏止り、討死せられけり、家久、勝て驕らず、人数をまとめ、陣を整ける処に、龍造寺の士、遠藤某、首一ツ、血に染たる刀に持添、「大将ハいつくにおハしまし候そ、功名の印の候」と(32ウ)云ふて、家久に近付より、首を投捨て、馬の上なる家久を一太刀切たりしに、家久、心とく馬より飛下りたれハ、左の草摺を切て、余る刀膝にあたりけり、遠藤を中に取込て討んとすれハ、家久、「あたらものを討な」と下知しけれハ、生捕んとすれとも、本より今日を最期と思ひ定めて切て廻りし故に、遂に討れけり、遠藤とのミ云て名をハ名のらず、家久、遠藤か首を膝の上に置、「ならひなき剛の者、義勇の士トハ此男をこそ言へけれ、生捕て対面し、龍造寺に送り返んと思ひしに、思ひ切たる戦士ついでせられしかハ、力に及す」とて、近き所の僧に遠藤か吊ひの事、懇に沙汰し、其有様を詳に記して故郷にやられけり、家久ハ、島津家の士大将なり、豊久、後又中務と称し、関ヶ原に(33オ)於て、義弘に代り、討死有しハ此人なり、

○立花道雪、若かりし時、雷に焚れ、足痿、歩行心に任せず、常に手輿乗れり、累代、大友家に属す、大友家衰えけれとも、道雪心を変せず、武勇逞しき人にて、士卒を見る事、子を愛するか如し、戦に臨む時、二尺七寸有ける刀と種ヶ島の銃炮を手輿に入、三尺斗りの棒に腕貫をして手に提、乗られ、長き刀差たる若き士百余人、手輿の左右に打具し、軍始れハ棒をもて手輿をたゞき、「エイトウ」と声を上、「此輿を敵の真中へかき入よ」とて拍子を取り、速き時ハ輿の前後をたゞかれけるゆへ、面もふらすかき入れ、手輿の左右の士、三尺余りの刀を抜連て、一文字に切てかゞりけるゆへ、先陣の者とも、「すはや、例の音頭よ」と言も(33ウ)あえず、我先にと競かゞり、いかなる堅陣をも切崩さすと云事なく、若、先陣追立らる時、道雪大声上、「我を敵の中にかき入よ、

命おしくハ其後逃よ」と、眼を見出し下知せられし程に、もり返して、勝さる事なし、かゝれハ道雪の士ハ、一日に幾度鎗を合たると云もの多し、又道雪常に、「士に弱き者ハなきもの也、若、弱きものあらハ、其人弱きハあらず、大将のはけまさゝる罪也、家士ハ言にや及ぶ、下部に至るまで、功名なきハあらず、他の家にておくれたる士あらハ、我方に参り仕へよ、とりかひて逸物にせん、我士の四月朔日左三兵衛ハ、若き時、初ての軍に後れし事ありしに、いつの頃よりか血キマ、トリくさき事に遭て、次第に物になれ、今五六人の剛の者と、世に云ハるゝ所かし、たまゝ武功なき士あれハ、あき(34オ)塞りの有ハ武功の事よ、弱からざるハ我見定たり、明るにも軍に出んに、人にそゝのかされ、必抜かけして討死し給ふな、夫ハ不忠なり、身を全くして道雪を見つきて給ハれ、各を打連たれハこそ、斯年老たる身の、敵の真中に有てひるみたる色を見せさるぞ」と、いと懇に睦しく云て、酒酌かハし、其頃はやりける武具取出し与えられける、是に励まされて、「重て軍あらん時に、必人におくれし」と、勇ミしとなり、聊も武士振の能見ゆれハ、呼出して「あれ人ゝ見候へ、此道雪か見し処に違ふへきにあらず」とて、勝れたる剛の者の名を呼て、「頼候ほとに、能引廻してよ」と云、又「人ゝの心を合せらるゝ事、此道雪ハ天の冥加に叶ひたる事よ」と、勇めたて、又若き士の、席(34ウ)上にて心得あやまちたる事有し時ハ、客の前杯に呼出し、打笑ひ、「道雪か士ハふつゝかにこそあれ、されとも軍に臨て火花をちらし候、鎗ハ此人等こそ、能すれ」とて、鎗をつ取たる真似して誉られしかハ、感涙を流し、「此人の為に命を捨ん」と、励ミけるとなり、

○豊後国合志常陸守を大友義鎮攻る時、佐伯紀伊守惟教、大将たり、佐伯か士大将高畑三河、一日に十三度の功名



あり、其後、或人問て云、「僅に鎗刀一両度せり合ても、大に疲れ、息切れて、小兒にも負へきに、一日に十三度の功名ハ、たとへ志はあく迄も剛なりとも、力も息もつゝきぬることいふかしけれ」と云、高畑聞て打笑ひ、「剛の子細もなき事なり、我戦場（35才）に打臨てハ、勿論の事とハ云なからも、死生存亡の間に於て、少しの思案を費すへき事なし、さる故に人ハ騒しくても我静なり、大方ハ鎗を合せ太刀を打ちかへさる以前に、力を出し氣を強ならん、是によりて精神くたひれ疲れたるならん、我敵に逢ふ時ハ、我首を敵に取らするか、敵の首を我取るか、此二ツの中、天命にありと思ひて、初めハ緩きに似たれとも、相逢ふ時一決して一鎗の中に勝負わかるゝ故に、疲るゝ事なく候なり、不入処にて氣を苦しめさるゆへ、幾度事に逢ても心中安閑なり」と、答えけるとそ、

○信長、江州小谷の城攻に、伊藤七藏先駆したるに、従者取付たるゆへ、上帯切れて、刀も脇差も堀下に落る、七藏少しも（35ウ）ひるます乗込て、柵の木を取て敵三人たゞき伏せ、功名しけり、又尾州一本木の軍に、事急に於て、編笠をかむり一番鎗を合せけるゆへ、信長大に称美して、編笠とよはれける、後、秀吉に仕えて、度々の功名有しかハ、紫紬井筒の紋、広袖の小袖を与えられけれハ、冑の上に着たり、秀吉の旗奉行となりたり、

○清正、一揆を攻る時、或夜、森本義太夫、清正の前にて軍評定せしに、「凡、組討ハ力によらず、心剛にて手き、たれハ易きものなり」と申を、清正、「組討ハ危きもの也、勇誇る時ハ必仕損すへし」と戒られぬ、其翌日、清正の真先に義太夫乗進むる処に、歩武者一人よせ合たり、森本、聞ゆる馬の上手なれハ、（36才）敵横さまにあてゝひらりと飛をり、立あからんとする敵を引組て、やかて首を取、清正に向ひ、「夕「た」を朱でミセケチで「夕」に訂

正へ申せしに違ひ候や」といへハ、清正、大に賞せられけり、

○竹中半兵衛重治か曰、「分に過たる価を以て、馬を購ふへからず、其馬に乗たる時、よき敵と見かけ追つめて飛下んと思ふか、或又、鎗を合さんと下り立時、馬副のつゝかされハ、『此馬人の馬になるへし、又かゝる馬ハ得かたし』と云心出て、期をのこす事有、此よき馬ゆへに、却て名を失ふ事もあるへし、士ハ金十兩にて馬を購ハんとするに、五兩にてもとむへし、おしけもなく飛下り、乗放ちてよき時ハ捨もすへし、扱又、五兩の金にて馬を求むへし、馬に限らず、此心得あるへきなり、身をも義理にて捨るそかし、(36ウ)まして財宝をや、塵芥とも思ハぬ心かけ、常にあるこそ士の本意なれ」

○明智光秀か士、野々口彦助、山中鹿之助に逢て、功名せん事を問、鹿之助、「物前にハ、必ず目の明ぬものなり、能心得られよ」と云、彦助〔彦助〕を朱で補、させる事とも思ハす、其後、いつれの戦にや、河際に野々口打出たる所に、朝霧たなひきて物の色見えわかす、時に山中か教えたる言を思ひたし、手綱をひかへ、「目か見えぬと云しハ、我おくれたるならん」と目をふさき、心をしつめて目を開きたるに、川の半に物の具したる武者、大差物をさして只一騎渡り来るを見付て、心もさハやかに目も明らかに成たれハ、おし並へて引組て〔引組て〕を朱で補落、首を取たり、後に彦助、「是も我真実の功名にハ(37オ)あらし、彼敵も大差物にて、采の勞れて、たやすく組しかれたるならめ、彼敵も、物前に目も見えさりつらんものを」と、語りけり、

○石谷十藏貞清、坪内玄蕃に向て、「度々の功名、世に高し、あハれ心かけにて功名を遂へき道もあらハ、教えられよ」と云、坪内聞て、「能こそ問れたれ、人々、事に望ミ、神の力を頼ミ、八幡く」と云、我も亦たのミてハ

相たのみになりて成就せしと思ふにより、我ハいつも八幡といふ神を刺通さんと一筋に思ひ入て、度々おくれを取らざりし」と、云けるとそ、

○平野与兵衛ハ斎藤家の士なるに、是も武功誉れ高く、信長、是を招しに、人々往て平野に對面する時、道化清十郎も打連て(37ウ)物語せしか、道化曰、「御身ハ掛るに先立、引に殿すと聞、其趣を委しく語て、教へられよ」と云へハ、平野「更に心掛ゆへにも候ハす、斎藤家に冥加に叶ふ士ハ、皆々討死しつ、我生残りて、重ての軍には必死と思ひつれとも、武勇の不足故に死をのかれ、今日の間にあひ、恥の上に恥にあひ候」と答へけれハ、道化聞て、「只今の答え、至極の道理にて候、先掛・殿ハ必死と志さすしてハ成かたし」と大にほめ、感しけり、

○谷太郎左衛門ハ武功の聞有て、黒田家に客の会釈に招き置れけり、谷か曰、「軍の場にて、先、敵より味方に氣を付へし、一人先へ進ミ出、踏こたゆる処に跡より二人三人行重らハ、始出たる者を強としるへし、其処へ行へからず、我ハ又別の処へふミ出して、こたへ居へき(38才)志せよ、暫くすれハ、又其所へ味方つゝくそかし、又、日頃心安き人の、ある主君に寵愛せらるゝとも、軍場にて其人のかたハラに寄るへからず、必独の心得すへし、又、士ハ弓・鎧炮のいわるゝ事本ノ、ト、ア、好む事にあらず、敵を打立度時か、或ハ城へ射込度事のあらんに、足輕ハ進ミかたき故に、人をさして命のあらん時、射あてされハ面目なし、危き場には、敵もかたく守るゆへに、多くハ犬死をする事あり」といへり、

○岐阜の城攻に、細川忠興、七曲りへ向はれしに、米田助右衛門、「あれ見給へ、あの矢倉、たやすく打破るへし」と申す、忠興「子細ハ如何に」といハる、米田、「今朝より、矢倉より打出す箭玉の、次第に少くなり候ハ、本

丸へ引入たるもの故に候」と申せハ、やかて軍をまとめて（38ウ）七曲り口を攻破られけり

○合渡川を渡す時、黒田長政の士大将黒田三左衛門可成、川の東より遙に敵を見渡で、長政のかたへに馬を乗よせ、「貫の枝釣の差物さして、黒き馬のたくましましきなるに乗たるハ、能敵なり、必討取へし」と云、長政、「勝敗ハ運命による事なり、などたやすく敵を討へき、さないひそ」と云れしに、可成耳にも聞入す、川に馬を打入、向の岸に馳上り、遂に彼武者を切て落し、首に差物添て得たりけり、石田か物主村上理助といへる剛の者なり、可成か此功を、毛付の功名とて、類ひなき誉れなり、

○合渡の軍に、長政の内に神谷小助、先かけにて、川を渡り（39オ）待掛たり、敵の中のため居てかけ入れハ、鎗玉にあけられ、既に危かりし時、長政の軍兵進ミかゝりて、敵を追立けれハ、小助流るゝ血に朱に染たるを、戸板にのせて長政の前に来る、小助「今日、我と先を争んもの、長政ならてハあるへからず」と思ひ、長政をきつと見て、ホマトラ「小助より先立て鎗を合せ候者、一人も候ハす」と申けれハ、長政、「汝ならて、誰か先かけすへき、手負候者の、気を張て物言ハあしき」と云れけり、小助、後に有馬の温泉に浴して、創癒へり、

○合渡にて、東国方の軍兵を追て、赤坂まで進ミ行時、高虎の士大将藤堂玄蕃、赤坂の町口に駆入、大音上げ、「百姓・町人をなやますにあらず、悪逆の輩を討平け、静謐に致さん（39ウ）為なり、皆ちつとも騒ぐへからず」と触通り、其後に家一ッ二ッ引壞し、東の方の町はつれにて、相図の烟りを立けり、高虎、大に悦で伝聞し、「古の王者の軍を学へる女蕃かな」とて、其日着せられし唐冠の冑を脱て与えられぬ、

〔未完〕